

事案名	横須賀市の事案（神奈川県14-7）
分類	生産・保有 廃棄・遺棄 発見・被災・掃海等処理 その他
資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「化学戦資材ノ件回答」昭和21年3月9日〔1〕</li> <li>・「各航空廠引渡目録」2/2〔2〕</li> <li>・証言（元横須賀鎮守府特別陸戦隊化兵隊員）〔3〕</li> <li>・「旧軍ガス弾等の全国調査結果報告（案）」資料3の2〔4〕</li> <li>・「毒ガス弾等調査資料」昭和47年6月5日〔5〕</li> <li>・証言〔6〕</li> <li>・「終戦時に於ける横須賀鎮守府関係参考資料」昭和22年〔7〕</li> <li>・『日本海軍史』第11巻〔8〕</li> </ul>
資料内容概要	<p>神奈川県横須賀市には、終戦時に、横須賀海軍軍需部に塩化アセトフェノン（催涙剤）とくしゃみ剤の型薬缶が保有されていた。横須賀港からはイペリット弾が発見され、昭和29年には掃海処理が行われている。</p> <p>昭和18年に千葉県の館山海軍砲術学校が横須賀海軍砲術学校に併合されたのに伴い、それまで館山海軍砲術学校が行っていた海軍の毒ガス戦の教育は横須賀海軍砲術学校の所管となった。また、終戦時に、横須賀の特別陸戦隊が保有するイペリット缶を山中に埋設したとの証言がある。</p> <p>生産・保有情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和20年8月1日現在、横須賀海軍軍需部には塩化アセトフェノンが52.5t存在していた〔1〕。</li> <li>・終戦時に、横須賀の第2海軍航空廠には、60kg爆弾（通常、陸用、1号、2号、3号、21号）・70kg爆弾（6号）・30kg（27号）の総計で4,801発存在していた〔2〕。</li> <li>・終戦時に、横須賀海軍軍需部にはくしゃみ剤の型薬缶が約30,000個貯蔵されていた〔1〕。</li> <li>・元特別陸戦隊員の証言として「昭和20年4月に山口県の防府海軍通信学校に72期生（200名）として入校した。沖縄戦の敗色から2ヶ月後には卒業ということになり、横須賀鎮守府に移動になった。横須賀では、特別陸戦隊（化兵隊）が新たに組織（少尉以下30名程度）され、横須賀の山中にバラックの兵舎を仮設し終戦まで駐屯した。駐屯場所は衣笠駅から30分ほど歩いた山中で、特別陸戦隊の任務（化兵隊の20名）は、アメリカ軍が横須賀に上陸してくるという想定で、毒ガス訓練を毎日行った。訓練はガスマスクや防護服を装備し、敵上陸地点を想定して噴霧器でイペリットを実際に撒布するという危険なものであった。演習場所は、兵舎か</li> </ul>

ら30分くらい歩いた川原（一面草原で用水路があった）で行った。訓練後、さらし粉で除染したが何人かのものが糜爛症状になった」と記載されている〔3〕。

#### 廃棄・遺棄情報

- ・横須賀海軍軍需部に保管されていた約30,000個のくしゃみ性ガスの型薬缶は、昭和20年9月2日以前に海中投棄されたものと推定される〔1〕。
- ・元特別陸戦隊員の証言として、「終戦から2ヶ月ほど横須賀に駐屯したが、8月20日頃に、残留していた20名ほどで部隊にあったイペリット缶(40～50kgの小型のドラム缶)4～5本を山中に埋設投棄した。ドラム缶は山中に深さ2mほどの穴を掘って埋めた。今まで、被害があったという話を聞いていないので米軍が掘り上げて持っていったのかもしれない」と記載されている〔3〕。

#### 発見・被災・掃海等処理情報

- ・昭和29年2月21日に、横須賀港でイペリット弾1発が発見された〔4〕。
- ・昭和29年2月21日に、横須賀港で爆発物件等引揚業者が引き揚げ搬入した126個の60kg爆弾を解体中、1発の爆弾から液体が漏洩して異臭を感じ、作業員5名が被災した。調査の結果、イペリットであることが判明し、海上警備隊(横須賀)に処分を依頼した。その後、防衛庁がこの処理を請け負ったというが、防衛庁は本件に関し記録はないと記載している。引揚業者によれば、海底には爆弾が500個位あると報告している〔5〕。
- ・昭和29年3月24日から31日にかけて、横須賀港の掃海作業でイペリットガス弾が発見されたが、数量は「不明」と記述されている〔4〕。
- ・昭和29年7月7日から8月6日にかけて、横須賀港の掃海作業でイペリットガス弾306発が発見された〔4〕。

#### その他情報

- ・元厚生省第2復員局員の証言として、「戦後、横須賀市の旧砲術学校に行ったときに防空壕の中に100から200のアルミのケースが置いてあり、ケースの中には長さ20cm・直径4cmの大きさのガラス筒が3本入っており、各々着色した液体が入っていた。液体の色は、薄い水色・黄色等であり、綿に包まれてアルミケース内に入っていた。その後、ケースがどうなったかは知らない」と記載されている〔6〕。
- ・横須賀市には、横須賀海軍通信学校と海軍水雷学校久里浜分校が存在していた〔7〕。また、横須賀海軍工作学校も存在し

	<p>ていたとの記述もある〔 8 〕。なお、海軍砲術学校は横須賀市内に存在していた〔 7 〕。</p>
--	---